

着物もインテリアも発想は同じ。  
総合的なデザイン力で、  
伝統技術を生かした現代の和を提唱

The Ideas Are the Same for Kimono and for Interiors.  
Using Comprehensive Design Ability to Propose  
a Modern Japanese Spirit That Utilizes Traditional Craftsmanship

きらびやかな装飾が施された「絹磨×JOTARO SAITO」のショップは従来の呉服店のイメージとはほど遠い。並ぶのは手染め友禅の着物や西陣織の帯、小物類だが、その色や柄、コーディネート感覚はまさに六本木の雰囲気そのままだ。

仕掛け人は着物作家の齊藤上太郎さん。染色作家の祖父と現代着物作家の父を持ち、友禅を礎とする近代染色の家系の跡取り息子として京都で育った。京都といえば分業制によって専門ごとに工芸技術の粋を極めてきた伝統的かつ保守的な産地。その粋組みの中で、「三才」は二代目齊藤三才氏の時代から着物と帯、和装品をトータルにデザイン・制作する独自のスタイルをつくり上げてきた。つまり、白生地の機屋、帯を織る機屋をはじめ、小物や多岐にわたるファッションアイテムのメーカーなど、多方面につくり手とのつながりを築いてきたということだ。三代目である齊藤さんがインテリアファブリックスの開発に乗り出すことができたのも、その土台があったことが大きい。

きっかけは、5年ほど前にデザイナーズホテルの内装として壁面に京友禅の柄を描いてほしい、という依頼が相次いだこと。それまでも着物地や帯地に

よる室内装飾ができないかという話があったが、公共空間における耐久性や堅牢度を約束できなければ仕事として請けられない。そんな折り、第1回を迎えた『100% Design Tokyo』で思い切って出展したインテリアファブリックスが好評を博す。

「手応えを感じました。工芸品をつくってきた自分たちでもできる、と。京都は昔から手間暇を惜しまず、品質のいいものを少しずつつづってきた土地柄。それを生かすには、コントラクトに特化し、モノ（生地を使った加工品）としての在庫を抱えず布だけを生産できる体勢をつくった方がいい。小回りを効かせているんな生地をつくり、家具調度から壁面まで一つの空間全体をトータルに提案できるようにしたかったんです。“大量に安く”は無理だけど、よそにはできないことをやりますよ、と」。その明確な事業のイメージは、作家というより経営者の発想である。

六本木のショップの天井に張られているのは、もともと風呂敷の柄としてデザインした図案を巨大に引き延ばして織り上げた生地。

「900(mm)幅まで織れる帯の織機を改造して、着物の絵羽（仕立てた時に縫い目で途切れずに柄が連続する模様）と同じように大きな柄を織れるようにし

着物作家

齊藤上太郎

Kimono Designer SAITO, Jotaro